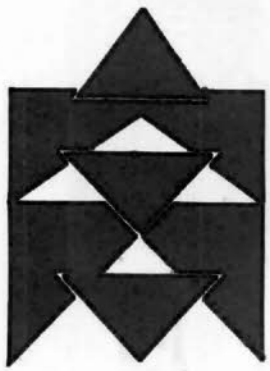


1984



高崎高校同窓会報

発行所
高崎高校同窓会
〒370
高崎市八千代町
2-4-1
TEL
0273-24-0074

第18号 昭和59年11月17日





同窓会の現況と未来

同窓会会長

原 一雄

開校以来既に八十七年に達し、二万名を越える卒業生を出した母校高崎高校が、開校以来最も優れた施設の充実と相まって、文武両面に亘って、北関東最優秀の名門校とうたわれております事は、度々お知らせ致した通りであります。御同慶にたえないところであります。同窓会におきましては、三年の後に母校が九十周年を迎えるのであります。これに備えての祝典、記念行事を行います。また、総会役員会の議をへながら、PTAの各位と相対さえて目下立案中であります。その実行委員会、すべて前の八十周年の例にならって組織されるわけでありますが、会員の皆様の格段の御支援と御協力を望んでやみません。

人間は誰にとりまして、人生は只一度であり、それぞれの方がその大切な生涯を送るのに、我高を母校にもち、ここに流れる剛健清潔な校風精神を、自らの心の背骨として持ち続け得ますことは、一生に於ての幸福であります。その母校を尚一層に輝やかしいものにしてゆくためと相互の厚い親睦のために、同窓会の活動は存在するのであります。その一端として、現在まで管理委員会により保管されております三千万円を基金として財団法人の育英の会の設立手続きが進められております。どの様な運命立場にある若い人の為にも、その勉学の応援の途が開けます事は大きな

意義があります。こういう大きな理想を押し進めます事は、もとより困難な事は承知しておりますが、良い事は進んで実行しようとするのも、やむにやまれぬ高々精神であり、この運動の将来の充実に期待してやみません。

同窓会の活動もすべて定着し、着実に実行に移されておりますが、毎年一月におきます定時総会は、凡そ五十歳に到達する年次の期により運営され、益々盛大の度を増しており、本年は五十三期の主催により五百人に及ぶ盛会となりました。また本校同窓会をかこむ地域職場等の同窓会活動も益々盛んになり、京浜の三千人近い大集団を始め、県庁、市役所に於ても夫々二百名を越えるグループ活動があり、関西支部、信越線地区、更には女性を含む通信制の同窓会等活潑の度を増しつつあります。

しかし良い事ばかりではなく、今年は同窓会のための顧問として永年尽された大先輩の浜名一雄氏、常任理事の市川清氏、副会長であった真下英夫氏等相ついで亡くなられた事は痛惜にたえません。謹んで哀悼申上げる次第であります。

同窓会活動は、すべて会費の納入によりまかなわれておりますが、会員各位の進んでの会費納入をお願い申し上げます。

◇高々同窓会報No.18目次◇

同窓会の現況と未来 同窓会会長

ごあいさつ

学校長

多感な高中時代

副会長

継承

PTA会長

ごあいさつ

通信制教頭

ずいそう・人生に心のゆとりを

特別寄稿・思い出の数々と近況

特別寄稿・一枚の写真

●私の回想記

関根 望

思い出すまま

本木 孝雄

懐しきライバル達

石田 幸雄

今はなき母校の思い出

松本 源治

なつかしいスクーリングの思い出

八木 晴江

論壇・教育改革の論議

永井 憲一

●同窓会だより

柳沢 和夫

京浜高々会だより

早乙女七五三男

通信制同窓会

海保 芳和

高中高々安中会

海老原英吉

第33回卒業生五十年の会

第38回高々・前高定期戦

●母校だより

運動部報告

全国総体へ二競技出場

中原射鹿止

学芸部報告

佐藤 忠弘

生物部

森 慶寿

最近の進学状況について

財団法人設立経緯報告

ローマンを求めて

田中 順

トレーニング機器募金報告

原 一雄

第八三回高々同窓会新年総会へのお誘い

土屋文明氏が文化功労者に

同窓会費期別納入状況

会計報告

翠樹文庫・庶務報告

事務局だより

20 19 15 10

◇ 19 18 ◇ 17 16

15 14 13 12

11 10 9 ◇ 8

7 6 5 ◇ 4 ◇ 3 2



ごあいさつ

学校長 水穴 再喜

同窓会の皆様には、平素より母校のために格段のご尽力を賜わり、厚く感謝致しております。この度は、お陰さまで屋内総合体育館内に立派なトレーニング機器が設置されました。重ねてお礼申し上げます。さて、この機会に、文武両道を光輝ある伝統とする高高一年間を振り返り、明日への飛躍の資と致したいと存じます。

今春の大学入試状況は、現浪合せで、東大8、京大6、東工大6、東北大24、筑波大7、早太89、慶大44等々と例年を上回る成果を得ることができました。これは、生徒と教師の深い信頼関係に基づく切磋琢磨があったればこそと心強く思っております。目をスポーツに転じますと、5月の県高校総体では、総合第2位の成績を上げ、前記進学実績と共に、文字通り文武両道県下無双の名をほしいままにしました。

しい勉学に汗を流しました。スポーツのみでなく、学問に流す汗と涙のあることを、生徒は知ってくれたことと思います。9月には、県当局のご厚意によりオックスフォード大学卒業の英国人教師、リチャード・スミス氏を迎えました。教育の、国際化社会への対応が求められている現在、誠に時宜を得たものであります。また、同じ9月に、恒例の前高との定期戦が実施されました。前半はいささか苦しい戦いでしたが、終ってみると高高一圧勝でした。

教師不信、非行、校内暴力等が相変わらずかまびすしい昨今ですが、高にこの悲劇はありません。われわれは、教師生徒一丸となって、高の栄光に一層の輝きを加えるべく、豊かな情操に根をおろす、高い知性とたくましい意志を持った創造性あふれる学園を創り上げて行きます。末筆ながら同窓会各位のご健勝をお祈り致します。



多感な高中時代

副会長 小山 禧一

私が高崎中学に入学したのが、昭和十三年四月、卒業が十八年三月、従って文字通り一番多感な青春時代を戦争の真只中で過した。個人の自由はすべて無視され、全体主義の枠の中で行動させられた。ゲートルを巻き、ズボンのポケットは縫い付け使用を禁止され、私達は汽車通であったので、駅から学校迄下級生を先頭に行列を組んで登校した。

食堂、喫茶店、映画館への出入は禁止され、年に二三回学校で映画参観につれてゆくという、今の学生諸君には想像出来ない時代であった。

一年生の夏、上和田から今の乗附に校舎が移転し、夏休み中机や椅子など一つ一つ汗まみれになって歩いて運んだのも当時は苦しい労働だったが今では一つの思い出となっている。三年生になったときに音楽の木戸先生の努力で始めて音楽部が出来て入部した。初代の主将は二年先輩の瀧川さんで総員12名であったと思う。楽器もクラリネット、トランペットを中心に十名位の小編成であったと記憶している。毎日、講堂で

軍歌ばかり練習させられた。或る時ワルツの「ドナウ河の漣」の楽譜をもって来てこれをやろうということになり、演奏してみてもこんなすばらしいものかと感じ、早く自由にこういったものが吹ける時代になったらどんなに楽しいことであろうと話合ったことを今でも憶えている。

こう書くとは後輩諸君は、大変きゅうくつな時代と思われるであろうが、その当時世の中すべてがそんな時代であったので、それほど苦痛には感じなかった。今の時代は自由で素晴らしい時代だから、感謝しなければいけないなんて説教をする気持は毛頭ない。いかなる時代でも青春は楽しいものであり、充分謳歌してほしい。母校も近く九十周年を迎える。九十年もの長い間に色々な時代がありそれぞれを生き抜いた同窓生の力で伝統がつけられたと思う。百年は生きられないから九十周年記念行事をやれという大先輩の声にはほえましさを感じるのには私一人ではあるまい。

(美峰酒類社長・42回)



継承

PTA会長 長野 幸國

八十周年記念事業で見違えるように変貌した高崎高校も、昨年は更に新プール、第二体育館を完成、特に館内トレーニング機器の設置には、また又多大の御援助をいただき、学校PTA共心から感謝申し上げます。更に九十周年記念事業も始まり、とかく懐古趣味になりがちな他校のそれと比べ、我が高崎高校同窓会が、常に確かな目で未来をみつめ、母校の発展と後輩達の育成に善意と情熱を傾ける前向きの姿に、今更ながら驚かされます。「意気壯」とはまさにこのことではないでしょうか。

元来高崎高校は伝統的に学校長を始めとして県下でも一流の高校教育のスタッフが揃っています。当座の目標大学入試で北関東一の実績を収めていることは、一方で学芸部運動部の目覚ましい活躍と相俟って、万人の認めることです。従って同窓会、PTAは、このスタッフが充分その力を発揮し実のある教育活動が行い易い環境を作ること、最も望ましい校の外側からすることが最も望ましい姿だと思います。そして設備の充



ごあいさつ

通信制教頭 経徳 弘廉

十九年前の昭和四十年に、高々教諭を拝命いたし、図らずも今年四月には通信制課程教頭を命ぜられ、戸惑いと不安のうちに着任いたしました。

これまでの全日制とは全く異った通信制課程の教育形態、生徒の多様な年令構成や学習目標などを理解するだけでも容易ではありませんでした。それだけに、この八ヶ月間、多くの先生方をはじめ皆様、ご迷惑をかけ通してまいりましたが、それにも関わらず学校長をはじめ諸先生、並びに同窓会の皆様様の温かいご指導をいただきまして、曲りなりにも大過なく重責を果たさせて頂いております。感謝いたしております。

今日まで、百八十余名の卒業生を送り出しました本校通信制は、勤労青年教育機関の一環として昭和二十三年に発足いたしました。現在の在籍生徒数六百三十七名中、三十歳以上六十六歳までの生徒が三百五十六名（五十六名）という数字、また、家庭の主婦の入学者増加などを考えますと、今日では多分に生涯教育の

一翼を担う性格が加わってきていることがわかります。

それにいたしましても、自学自習を建前とする通信制生徒にとりましては、高校卒業への道は想像以上に厳しく、家庭、職場のご理解は勿論のこと、同窓生皆様様の応援、ご激励がなければ、目標の達成は困難のようでございます。

幸いにも、本校同窓会は、原会長、早乙女通信制会長を始めとして、活発な活動を続け、物心両面にわたってご支援下さっておりますことは、生徒にとりまして非常な励みとなっております。

通信制職員、学校長以下十二名（外に兼務、非常勤九名）、もとより微力ではありますが、日夜試行錯誤をくり返しつつも全力で通信制教育に取り組んでおりますが、施設・設備の面でもまだまだお世話になること許りと存じます。こんごも、よろしくご支援、ご指導下さいますようお願いいたします。

（株）長野専務取締役 49回）

◆ずいそう◆

人生に
心のゆとりを

黒岩 達介



北緯六十度近くの北極圏にあるリクスグレンセンというスウェーデンのスキー場に行ったことがある。確か六月上旬であった。そのスキー場では、真夜中の十二時でも夜間照明なしにスキーが滑れた。白夜だからである。私は、その白夜のソフトな明りに包まれたスキー場に出かけて、ど肝を抜かんばかりに驚いた。真夜中だからではあるまいが、真裸でスキーを滑っている若者たちのグループにいき合ったからである。中には妖精のごとき少女たちが、誰をばばかることなく、肢体をくねらせながら、髪をなびかせ颯爽と滑っていたのである。私は、何度も夢か、現実か、と己を疑ったほどであった。

また、ある時は、オーストリアのチロルの山で、真冬の二月、やはり真裸の女子大生が、日光浴をしているところに遭遇して、実にびっくりしたり、あらぬ疑いをかけられたことがある。その時、たまたま私がカメラを首からぶらさげていたからである。私は何もその最も美しい、自然な姿の、女神のような、金髪美人を盗み撮りしようとしたまでではない。対斜面を滑走する自分のスキー仲間の写真を撮ろうとしたのである。ところで、ヨーロッパのレディーたちは、何故、スキーに出かけてまでも、真裸になってスキーをしたり、日光浴するのであろうか。それを理解するまでに、私はしばし時間を要したが、それには、それなりの理由があるのである。大げさにいえば、日光浴は、白人がかかえる宿命的な健康管理の手段なのである。つまり、ヨーロッパの平野部に在る都市の多くは、冬の間太陽に恵まれることが少なく、それが原因で疾患にかかりやすいという。とくに、白人に多い佝僂病は、冬の日光不足による影響が大きいといわれている。だから、

冬でも太陽が燦爛と降りそそぐスキーリゾートへ出かけ、ひたすら健康管理のために、彼女たちは肌を小麦色にこんがり焼いているのであって、カッコつけていると思ったら、大まちがいなのである。

それどころではない。彼等の日光浴の目的はほかにもある。それは単にオゾンや紫外線を吸収して、直接的な健康管理に役立てるばかりでなく、目の前に展開する白銀のパノラマの雄大な自然にひたり、心ゆくまでゆっくりとくつろぐ余裕を持つことがもう一つの目的だという。自然は、人間の心を浄化して、豊かな精神面での健康を約束してくれると、彼等は信じているからである。

さて、我が日本が日本のスキーヤーはどうか。一部の層をのぞいて、相変らずあわただしくスキーにやってくる。また、あわただしく帰っていく。日本における生活構造が、常に仕事重視型で、仕事をしていないと落着けず、ゆっくりとくつろぐ余裕などとても持てない生活環境にあるからだと思う。それは、長い歳月の中で、培われた日本人特有の体質であり、勤勉さであるのかも知れない。それ故か、現代の日本は多くの先端技術を生み、経済成長を成しとげてきている。が、一方働き盛りの日本人の大半が、自分の健康に自信を持ってない、という今日の実体調査をみると

き、身につまされる思いがする。

実は、私自身も、よく外国の知人から「お前の旅は、どうして、そんなにあくせくと、あわただしくとび回らなければならぬのだ。」といわれる。その都度、個人的な性格だとか、日本人の生活のサイクルが、そうさせるのだとかいってきた。しかし、常に反省を促され、己の生きざまに疑問を抱きつつ、いつの間にか五十歳を迎える。

「日本人は働きすぎ」と外国からやつかみをいわれている今日、ヨーロッパの一部の国に設定されているような、国民のスポーツ週間を設けてみてはどうか。全ての国民に、少なくとも年間、一週間の休日を与える。その目的は、ファミリーで、職場の仲間、あるいは個人で、好きなスポーツを通じ、体力の増進と心のゆとりを取りもどす時間に充たし、心身のバランスを養うために活用する。

「人間の幸福は、自然の中にこそある。」という先人の教訓がある。

幸い日本には、美しい自然と四季がある。その素晴らしい自然を活用するの、そのために時間をさくのも、我々自身に課せられた問題であり、責任でもある。

(万座スキー学校校長 52回)

●特別寄稿



思い出の数々と近況

田中徳次郎

一、飯塚村の機動演習

僕が高崎中学校を卒業したのは、大正二年の春と思うから、爾来已に七十余年も経過しているのに、当時のことは余り記憶していないが、唯五年生の時市村先生指導の下に、十一月の初冬軍事訓練で東西兩陣營に分かれて、飯塚村と大八木村の広野に曉の遭遇戦を行ったことがあった。東軍は僕が中隊長で、西軍は田中金司君（僕の従弟）が指揮官となり、腰に軍刀を帯び、兵は制服ゲートル巻きに身を固め、銃を持って意気軒昂、互に包囲作戦で肉迫し、朝霧を突いて勇ましく突撃戦に入り、終戦ラッパの指令で演習を終了したことは今以って愉快な思い出の一つである。

二、秋の修学旅行

五年生の修学旅行は伊勢神宮参拝

を兼ね三泊四日の関西への旅行で実に楽しかった。当時の旅行記が本箱にあったので、その記事の一部を抜粋しよう。

第一日（十月六日田中徳次郎記）

時これ菊花籬下に開き、夜半の鴉雁夢を破る十月六日の夜なり。過日來危ぶまれし空も拭へるが如く洗ひ清められ、碧天一塵の雲もなし。意気揚々と集りたる一行八十名は、村上、横田両先生に引率されて夜行列車に乗り高崎駅を離れた。列車は未だ悠々運歩試足の中にあるが、一行の心は已に京坂地方に飛び、快談縷々として止まざる裡に安中駅を過ぎれば、やがて車窓に妙義山の蒼龍の臥せる姿、潺々たる溪流淙々たる幽泉をぞる詩情を湧かすに足る。（以下略）

第二日（十月七日山口祐三郎記）

姥捨も過ぎ旅の疲れはいつか移りて、夢路を辿る。ふと眠より醒むれば、耳底に汽笛の響残れるあり。駅

夫の呼び声夢か現か。仰げば山頂の空は日光に彩られて、薄紫より桃色にさうして、黄色、紅と変りいとも美しき極みである。（以下略）

三、当時の先生と生徒

其の当時の先生としては、威厳高い伊藤校長、英語は動直な柴山先生、漢文は野趣豊かな猪狩先生、国語は端正な村上先生、化学は気ムスカシイ橋本先生、体操はコワイ顔の市村先生など印象に残る。然し諸先生は皆親切で、よく生徒の面倒を見て呉れたことは忘れられない。

生徒の方は昨今とは大違いで、余り勉強せず、適当に遊びよく遊んだ。殊に日曜日は勿論、祝祭日や暑中休暇などには近くの榛名山、妙義や赤城山へ登った。今も記憶するが、或る夏の日榛山政道、岡部弥太郎、田中金司君と僕の四人で赤城登山を試みた。帰路牛の小道に迷わされて谷川に下ってしまった。日は己に暮れ、山氣冷々一同色を失ったこの時蠟山君曰く、「川を下れば里がある。悲観する勿れ。」と叫んだが、果して数時間後一寒村に辿り着きホッとした。

四、僕の会社生活と近況

茲で少々僕の会社生活の一端を紹介しよう。大正六年三月元東京高等

商業学校を卒業し、直ちに三菱合資会社に入社した。大正八年三菱海上火災保険会社設立と同時に入社、昭和十九年東京海上火災保険会社との合併に伴ひ会社に転籍し、昭和廿年会社社長、会長を務め約十五年後の昭和卅五年会社を引退し、現在は会社の名誉顧問をしている。

会社では僕のために廿二階に一室を提供して呉れ、且つ自動車の使用も許して呉れているため、諸般の活動に大変便益を受け喜んでゐる。即ち現在三菱石油、東急電鉄、日本原子力産業会議、日本工業倶楽部の監査役、此他三、四の会社に関係して週二、三回は丸の内方面に出掛ける。去る八月廿日で僕も満九十歳を迎へたが、以御蔭耳も眼も異状なく、又内臓諸機関にも別状なく無事毎日を送っている。

五、僕の健康法

先ず肉體の健康維持の爲めに、毎朝冷水摩擦、十分間体操、排便、食事は腹八分目、食事時間は規則正しく、間食は一切やらない等々を六十年近く実践している。又運動としては之亦六十年近くゴルフを続け、現在九十歳を超えても毎週一回程度のゴルフは欠かさない。程ヶ谷カントリー倶楽部、スリーハンドレッド倶楽部が、霞ヶ関カンツリー倶楽部、而

して夏は軽井沢ゴルフ倶楽部、冬は川奈ゴルフ等では常連の一人である。次に精神の健全化（健康は肉体と精神の両面の鍛錬が大切）のために、常々悠揚、朗々たる精神の維持に努力している。人生何人と雖も苦楽多きは当然である。之を深刻に受け過ぎて、事前に徒らに杞憂を抱き又事後執拗に妄想に捕われては愚である。常に心平静但し一旦事起れば敢然全力投球が肝要だ。葉根譚の一節に「風疎林に来る、風過ぎて疎林

声を留めず。雁寒譚を渡る。雁去つて影を留めず。故に君子は事起つて心現じ、事去つて心空し云々」この間の消息を語って妙を得ている。結局身心の健全化を計ることが無病息災の基本と思う。

以上小文を寄贈したが、何か読む人の参考となれば、幸甚の至りである。蕪辞を陳謝して此の稿を終る。

（東京海上火災保険会社名誉顧問 12回）

●特別寄稿



一枚の写真

関根 望

前橋の煥乎堂が昭和五十七年に刊行した「目で見る群馬の百年」に、私にはことのほか思ひ出深い一枚の写真が載っている。これと同じものが、いやこれとはシャッターチャンスが五秒か十秒ずれているもう一枚が、私の古いアルバムの中にあり、私はそれをこの原稿と一緒に同窓会報に載せてもらおうとペンを運んでいる。

写真は昭和十九年、真っ白い予科練の正装をした岸英伯君を、私たち旧制高崎中学の同級生が囲んでいるものである。前方に斎藤欣二、私、柳武敏、佐藤幸雄、室賀清、後側に田上重信、中島次男、松岡連次、鈴木啓之、伊藤哲夫、斎藤謙、久保和夫、矢島弘一、紫藤孝らの諸兄が見える。

もう四十年も昔になるその年から、

私たち旧制高崎中三年生は学徒動員で軍需工場へ通いはじめた。工場からの帰り道、軍服姿も凛々しい岸君を囲んでしばし歓談したのだった。当時十五歳の少年たちの顔は、すこぶる和やかで健やかである。考証家が指摘しそうな、暗い戦雲の陰などどこにもない。戦争の不安にも受験の緊張にも、わずかに早い、よき時代であったのかもしれない。

伊藤君はいつも真剣に執拗に物事と取組む男であった。それは私には教訓だというと、彼は顔をクシャクシャにして照れていた。その彼が世を去ってすでに久しい。ともに数学好きで仲よしだった柳君。途中で文転した私にはとくに懐しい友人の一人だ。在学中は野球のヒーローで今はクラス会を支えてくれる中島君。私がエコノミスト編集長だったころ、お前んとこの雑誌はオレには睡眠薬だといった一橋出身の愛すべき鈴木君。……

友人の顔はすべて懐しいが、この写真を見ると私はここに写っていないもう一人の男を思い浮べる。それはレンズの向うでシャッターを押していた小沢正道君だ。

この日、岸君は小沢宅の夕食に招かれていたらしかった。それとは知らず、岸君と帰途が同じである故に夕暮まで残っていた私と伊藤君は、岸君と一緒に夕餉の仲間入りをする

ことになった。食卓の御馳走は何ひとつ思い出せないが、はじめて口にしたビールの苦くて禁忌を思わせるような味覚が記憶に鮮明である。

翌日、母は私に小沢宅への礼の粗品を持たせたように思う。私と小沢君とは、はじめて同クラスになったばかりで口をきいたこともなく、そんな友人の家で歓待にあずかったことへの母の配慮であったのだろう。それから彼と私の交友ははじまり、四十年たっても変わるところがない。

理科志望の浪人中であった私に、すでに自分は入学していた早稲田の、それも文科系を受験させたのが彼である。この日からの小沢君との交友が始っていなければ、早稲田に入ることなかったし、新聞社に入ることもなかったに違いない。

これは、私を宿命的な思いに誘いこむ、忘れがたい一枚の写真なのである。

（毎日新聞社出版局長 46回）



私の回想記

その4

●回想

思い出すまま

本木 孝雄

入学時は高高が火事で焼けて城内の兵舎だった。室内に入ると男の匂がした。マンキー、ターザン、キョウケン、タヌキ、狸の方が似合うかな？やはり「たぬき」の方だろう。どうして動物の名前ばかりを先生のニックネームにつけたんだろう？「ミシミテタックルシロ」と小柄な富田先生の顔が目に見える様だ。ラグビーは当時は校技の様なものだった。まだ物のない時代でハダシの生徒もいた。冬は足が冷たかったがたいして気にもならなかった。もっとも日常生活も今考えると原始時代の様なものだった。登校するには鳥川を渡らねばならなかった。今は使用してないが八千代橋の長いこと寒いこと学校の許可のない学生はほとんど歩き、しかも足はホウバに素足で通した。当時はスゴイ学校に入っちゃったなと思ったが、今考えればあれもこれも教育だったのかと有難い。三年の時は担当矢島先生

で自分の机の囲りには吉田春雄、山口英雄、岸銓一郎、とモサが居た。吉田は野球部で授業中は何時もいねむりをして居た。数学の倉上先生の時いびきが大きすぎて黒板に出された難問を解かされた。時間の終りにはなんとか正解が出た。やはり奴は頭がいいんだなあとと思った。同じ運動部でもラグビー部の山口はあまり昼寝はしなかった。彼は今でも一番馬力がある。何の試験の時か記憶はないのだが四問出た。五分位たつとK君は答案を出すと云う。見れば白紙だ。何とかするからもう少し待っていろと云うので僕が隣近所から正解らしいものを輸入した。K君にパーターなしで輸出するからと云ったら断わられた。彼は名前だけ書いてすたこら白紙の答案を出しに行った。たいした男だと思った。彼の考え方は今も変っていない、僕は中学が新島学園で試験の時は先生は答案用紙だけ配布し質問はないかの一言を残

こすといなくなった。此れも変わったやり方だと思ったが高高にも同じ様な奴が居た。卒業して何年かは同窓会はなかった。しばらくすると羽鳥君と山口君がまとめ役をしてくれた。東京では芹沢君が幹事長で二水会がある。第二水曜日に旧交を温めている。場所はアイビー、東京駅八重州

●回想

懐しきライバル達

石田 安利

小中学校の成績は、宿題を忘れず済ませて来る子や、授業中、真実面に脳目も振らず先生の話を聞いて居る生徒が、概ね成績も良い様だが、高等学校になると、各々の個性が徐々に発揮され漢文だけやたらに強くて、漢詩ばかり読んで居る生徒や、密かに家庭教師でもついて居るのか英語の時間になると、肩いからして教科書に無い事まで質問するイヤラシイ奴、普段はその存在を忘れられて体育の時間になると、急にクラス中の注目を浴びるサッカー部員と多士済々。

高等学校を大学受験の単なるステ

ップと考えて受験科目を専らに、それ以外の科目に見向きもしない浅ましい生徒が、最近多い様だが、我々の時代は未だそんな風潮は無く、国語教師の篠や、英語教師の白墨が自分の頭に降り懸からぬを願って勉強した。

徒然草にもある如く、いでやこの世に生まれては願わしかるべき事は多いが、眉目秀麗、頭脳明晰、スポーツ万能、ついでにセーラー服の乙女達にも、好ましく思われたく願うのは、凡人の常だが、我が身を鏡に写して、彼我の隔たりを嘆じ、身の丈短きは親のせい、殴られて顔

にアザ作って我が武力の拙さを託つ日々。

頭の細胞は親より授かった数なれば、せめてそこへ勉強し、世間並みの教養も身につけ、スポーツも程々に励むべく、ライバル作るは進歩の助けと、我が同級生を見渡せば、ガリ勉生徒は我が趣味に合わない。東大志望にも拘わらず、泰然自若として、和洋の文学読みあさり、明治時代の書生よろしく人生について語る様が好ましいH君、現在は某テレビ局のプロデューサーとして活躍中で、未だ文人ならんとする夢は棄てずと聞く。

喧嘩早くて運動神経抜群のM君は、昔振り廻した竹刀を、メスに取換え大きな総合病院のお医者様。プレスリーやビートルズは未だ現

●回想

今はなき母校の思い出

松本 源治

終戦後四年半を経過し、ようやく復興の槌音高い二十五年の春、諸事情から全日制をあきらめ、市立高等学校へ入学した。農作業で疲れた身体に鞭打ち、二Kの道程りを親友との通学が始まった、当時全日制入学者は四〇％位であり、夜学通学にかえて誇りを感じていた。入学時五

われず、ジャズ全盛の時代、楽器いじりまわすのが当世風、わけても音楽器が花形、トロンボーンの長いケース小脇に抱え通学する様妬ましく、女学生にもてるは楽器のせいと、横目に見たN君の消息は、今は知らない。

高校時代に経験せず悔まれる事は運動部に入らなかった事で、青春の熱き血潮に溢れた体から、一滴の汗も校庭に流さず三年間を過ごしたのが今も悔まれ、テレビのメロドラマには涙流さぬが、高校野球やラグビーに理由もなく感激し、勝者の乱舞、敗者の号泣する姿に、目頭が熱くなる。せめてもう一度、我が母校の野球を、甲子園で見たいものと、願っている。

(石田建材工業社長 55回)



高崎市立高等学校柔道部

であった。

一年の三学期に思わぬ事態が発生した。登校途中けたたましい消防車のサイレンである、立ち止って見ると学校の方角より黒煙が立ち上って居た。ベダルに力を入れ、身振いを感じながら急いだ。まさしく学校から火の手が上っていた、学校が燃えている、到着後なすすべもなく立ちすくんでしまった。北校舎、図書館等焼失してしまい授業どころではなかった。半月位後に、旧連隊の兵舎に移りようやく授業が再開された。約一年余、連隊通いを続け、三年の初めより本校へ戻った。忘れ得ぬ大出来事であった。

二、三、四年と担任は大塚嘉彦先生であった。二年の初めに言われた先生の言葉は今もはっきりと脳裡に刻み込まれている。「昼労働して疲れた

身体で勉学に励むことは大変な根性と努力を要する。しかし疲れの為に睡眠に襲われるようであつたら静かに休め、やる時はとことんやれ。又同じ境遇であるクラスメートをいたわり合い、友情の絆を固く結び末長い交際が出来るよう友人関係を確立しなさい。」と、三十数年たった今、改めて先生の教訓に感謝の意を新たにすると共に、大塚先生に出会い、大勢の友を得たことは私の喜びとするところであり、宝である。

夕食を取る時間もなく空腹をかかえての授業なので、休み時間になると無人のパン売り場でパンを求め、かじりながら教室へ戻るという日課であった。授業中は時々眠気に見舞われたが、終業のベルが鳴ると不思議と目が醒めた。九時に終り、いよいよ部活の時間である、県下で初めてのスプリング入り柔道場が三年の秋完成し、部員と十一時近くまで練習に励んだ。四年の時、西毛大会で三位入賞をはたした。二十九年三月我々の卒業を最後に市立高校の名称も消滅し、翌年より定時制となった。卒業後は代表幹事に推され、数年前おきに同窓会を開催し、旧交を暖めている。今は母校もなく一抹の淋しさは隠し切れないが、本会の常任理事として仲間に加えていただいている事に感謝している。

(八千代寿司経営 市立高校6回)

●回想

なつかしいスクーリングの思い出

八木 清江

昭和三十六年三月十二日、通信制の卒業生は浅井博さんとわたしの二人だった。風の冷たい日で、講堂は冷え込んでいた。そう寒かった。靴下を重ねてはいていたが指先が痛かった。

全日制高校の時に病気になり、長い療養生活の後に高々通信制へ入学したわたしは、スクーリングへの出席がたいへんだった。バスに乗るのが特に辛かった。最初は学校へ着くと大仕事を終えた後のように疲れを覚えた。発病前に前女で教えていた

だいた高橋信男先生(当時高々全日制勤務)が、スクーリングの時は一晩泊っていくようにおっしゃってくださったので、ご親切に甘えて何度も泊めていただいた。奥さんにもほんとにお世話になった。病弱だったわたしはたくさんの方々に支えられて卒業できたのだ。

スクーリングはたいへんだったが久しぶりの学校は新鮮だった。いろんな職業の友だちがいるのが珍しく、誰の話でもみんな感心しながら聞いた。お昼休みには歌を唄った。

ハーモニカの上手な矢野さんが、なぜか唄うと調子はずれるのがおかしかった。その矢野さんも後に心臓の手術で急逝した。あの明るい笑顔が今はもう見られない。

眼をとじるとあの頃みんな唄った「山のロザリオ」心の窓にともしびを」などが思い出され、時に一人で口ずさんだりする。坂本九の「上を向いて歩こう」が流行していた頃で、面白い歌が流行しはじめたと思ったものだ。また「せせらぎ」も時々発行され、自宅で勉強するわたし達を励ましてくれた。「せせらぎ」

の編集会議で、スクーリングのない日曜日に松本悦治先生のお宅へ集ったのも忘れられない思い出だ。編集会議でいつも一緒だった堀内さんは、スキーの事故で卒業を真近

に控えてお亡くなりになった。どんなに心残りだったろうかと思う。

今、わたしは前橋第二高校の図書館へ勤務している。前橋第二高校は昼間部、夜間部、通信制の設置された定時制独立高校だ。働きながら学んでいる生徒達をみると、高々通信制で学んだ頃の友達の顔が次々と浮んで、昨日のことのようになつかしい。

わたし達はのんびりしていたのだろう。先生方がたびたび「眠れる獅子よ、眼をさませ」と励まされた。「眠れる獅子よ」と励ましてくださった先生方の気持が、わたしもやっとなるような気がする。転動して二年目、スクーリングの時の貸出冊数も徐々に増加している。

(前橋第二高校図書館司書 通3回)



卒業時の記念写真

第八三高々同窓会 新年総会へのお誘い

当番期代表 小保方正彦(54期)

同窓会の皆様、お元気でお通りの事と思います。この秋には土屋文明先生の文化功労章第2次中曾根内閣の誕生等おめでたいことが重なりました。土屋先生は93歳、明治42年3月卒業の第8回生です。

さて、同窓会総会、昨年は53期本木幹事の下、高崎ターミナルホテルで開催され、会員の皆様の御努力で大勢の方々がお集りになりました。今回は同窓会幹事、学校当局と相談の上会場を高崎の中心街柳川町の高崎ビューホテルで開催することになりました。

新しい企画の同窓会をと本年度幹事で相談いたしましたが、同窓会はマンネリといわれても、お互い元気を顔を見せあうことに意味があるという結論に達し、これまで通りの計画を進めて参りました。

青春の花衰えず、どうか皆様のお元気なお姿を会場にお運びください。そして、青春の心意気の一端をお示しいただければ幸いです。多くの方々の御出席をお願いいたします。

期日☆昭和60年1月26日(土)
時間☆午後3時
場所☆高崎ビューホテル
会費☆4000円



昨年の新年総会

◆論壇◆

教育改革の論議



永井 憲一

(法政大学法学部教授、法学博士、
日本教育法学会理事、事務局長、
49期4年修了)

早いもので、もう大学での教壇生活も、まもなく三十年になる。先日ある裁判に鑑定人として出廷したら、裁判官も弁護士も、双方が早大での教え子であった。自分の職業のもつ社会性と影響の大きさに、あらためて驚いた。

その三十年の間に、何千人、何万人もの学生が、自分の前を通り過ぎた。ごく親しく接したゼミの学生でも数百人におよぶ。だから、その時期ごとの「若者気質」が、よくわかる。大体、十年を一つのサイクルとして、大きく変わってきている。われわれ世代は、人間なんて、ギリシャの昔から、生きること、考えることの哲学や、感性や美学、あるいは人間相互の関係など、そう大きくは変わっていない、と教えられ、そう信じている。けれども、ここ十年、二十

らない。

ところが、近年しきりに教育改革の必要性が、あちこちから強調されだしている。それを、よくみると、また、みな違う。経済同友会「人づくりへの提言」や、世界を考える京都座会「学校教育活性化のための七つの提言」など、おもに財界からは、個性の尊重、学校設置の自由、入試の自由、教育の多様化と弾力化、教育の国際化などが提唱されている。

すでに周知の、貿易摩擦にみられるような製品輸出による経済成長時代の終焉を見通す危機感から、財界は、技術立国——それも模倣から創造への脱皮を余儀なくされる——への転換をめざし、教育改革を急務とする。また政界からは、同じ危機感から、ますます日本の伝統的な民族意識を教育を通じて国民に徹底し、愛国心の高揚による国民の連帯を形成しようという意図する。そして二十一世紀における技術輸出競争を支える軍備強化へのナショナル・コンセンサス(国民的合意)の形成を教育を通じて実現しようとする教育改革論を提唱する。例えば、そのための教育基本法の見直し、教育勅語の讃美、教科書法の制定、教員免許法の改定政策などである。こうした財界と政界の思惑は、必ずしも一致はしていない。先輩である中曽根首相のもとで発足した臨時教育審議会は、したがって、

かなり前途多難を思わせる。

一方、こうした動向に対して批判的な世論も強い。政財界からの教育改革論は、個人の尊重といっても、実は、従来より以上に、能力主義と超エリート養成のためのものとなり、公費による機会均等の学校教育の理念を否定するまでには至らないか、ますます教育が「選別と差別」の社会機構に堕し、しかも教育全体が軍国主義化される危険がある、などである。だから、臨時教育審議会が答申をだすまでの三年間は、これから大いに国民の間に教育改革論議が加熱されてくることとなる。そうなれば、大いに結構なことだと思ふ。その論議を通して、これからの日本の社会のあり方と、それに対する一人ひとりの責任とが、考えられ、自覚されるようになるであろうからである。

いまの若者の多くは、どうせ自分たちが努力をしてもどうなるわけでもない日本の将来のことなど、考えること自体がグサイ(いま向きでない)という。そういう若者をこそ、その教育改革論議に巻き込んでいく必要がある。民主政治とは、近代的な権力分立制が単に置かれていることではない。国民の一人ひとりが自分の住む社会の明日に責任をもつ政治でなくてはならない。そう思うからである。

年の間の若者の変わり方は、実に激しい。ますます利己主義になり、一人ひとりが閉鎖的になり、そしてバラバラになっていく。

いまは明治、大正、昭和、そして戦後時代、安保改定期、大学紛争期、高度経済成長期と、それぞれに生れ育った人間が、激動の社会の中で育まれた異質な「気質」を持ち合せながらも、どうにか一つのライフ・ス

テージに同居している。が、今後はどうなるのか、本当に行く末が案じられる。しかし、こうなった原因が、戦後の教育にだけあるとは思えない。その間の、科学技術の進歩や生活様式の文化的変容、あるいは急激な高度経済成長によるひずみ、社会構造の管理主義的安定など、また直接的には受験競争の激化などが、すべて、その原因として考えられなくてはな

同窓会だより

京浜高々会だより

柳沢 和夫

十月二十日(土)、銀座七丁目の画廊に中曽根信雄画伯(39回)の個展を見に行った。ヌードと静物と風景画が程よく展示され盛会だった。

中曽根さんは多忙の様子だったが、お茶を飲んで帰り際に、突然、

「あなたに会ったのは神の助けだ。すまんがこれを頼むよ。母校の本部宛の原稿なんだけど、この通りで書いてるヒマがないんだ。少しぐらい遅れても良いだろう。」と、代りの原稿書きを押しつけられる破目になった。

もとより京浜高々会を代表してモノを書くような立場ではない。京浜高々会の機関誌「翠巒」編集の手伝いをしたのが縁となり、当時銀座七丁目並木通りにあった明星電気に入り始めて以来二十余年の転変を経た。

小生など万年雑用係、使い走りを目撃しているから、幹事会などへ出て幹事諸氏の意見に耳を傾けるば

かりで、芝居で言えばその他大勢、よくて並び大名。公正妥当な財務報告など書きよう筈がない。会の財政状況など幹事会では細かくやっているが余り関心を持ったこともない。

だから主観が多分に入った京浜地区だよりを書く。実感だけを書こう。

例年二月になると幹事会が開かれ、雑誌「翠巒」の編集方法、編集責任者を決める。母校の卒業式に京浜地区を代表して出席する人の選任、それから今年の新入生歓迎会の日時、場所、段取りを決めている。これには出席していないが、確か今年の卒業式に行かれたのは宮本武徳さん、真下英夫さんだったと記憶する。

その真下副会長が二ヶ月程の入院で五月二十五日逝去。食道ガンだった。あまりに不意だったので幹事の中にも知らなかった人が多いようだ。

十月十七日、新橋での幹事会に出ると、エレベーター前で肩を叩かれた。久しぶりの萩原四郎さんで、「おい、ドバちゃん(真下さんの愛称)死んだんだってな。知らずに暑中見舞を出したら返事が来て、亡くなっただけ書いてあるんだ。吃驚したよ。」

当日は会計報告及び幹事忘年会の日程と後任副会長人事を決めて散会。十二月四日、於グラントパレス、

六時より会費七千五百円、幹事以外でも出席希望者があれば、各期幹事が同級生に呼びかけて参加可能となる。会計報告では七年ぶりに赤字から黒字に転じた由、芽出度い限りだ。

後任副会長は万場一致で岡本正己さんを選任、同時に京浜地区を代表して真下さん同様、本部同窓会の副会長を兼任することになる。岡本さんは就任承諾後、

「私はソ連で十一年間抑留されている間、常に懐かしく想出すのは高崎中学だった。」と望郷の念を吐露される。当日は高副会長ともう一人の副会長南雲さんも欠席、上利幹事長中心の幹事会となる。出席の最年長は田中三郎さん、八十二才になられる筈だが元気に会食される。さすがに八十才を機会に運転免許を返上したとか。

話の順序が逆になったが、五月二十九日(火)新入生歓迎会が平河町の海運会館で開催された。

前日の午後、岸芳彦さんから突然電話があり、歓迎会の司会者に予定していた人が都合で出席が難しくなったから代りに司会をやるよう要請される。司会と名のつくものは結婚式の司会すら未経験なので、暗れがましい会場で人目を引く司会など真

平と再三辞退したが、岸さんから「いからおめえやれよ。」と言われると拒みきれず、ぶっつけ本番でやることになった。不馴れながらもどうか恰好だけの司会をやりおこせる。

来賓として山本富雄参院議員、京浜同窓を代表して南雲副会長の祝辞と上利幹事長の歓迎の辞、中曽根副幹事長の会務報告等あり、本部を代表して原同窓会長、続いて水穴校長、新入会員代表の答礼、最長老の井上房一郎さんは乾杯の意頭をとられた。あえて言わせて貰えば一連のスピーチの中で、ずしんと響いたのは校長の言葉で、「開会前のロビーで私に挨拶したのは〇〇只一人。こんなことでは駄目だ。すすんで挨拶のできる人間になれ。」と言う校長としての最後の一喝であった。大先輩たちはそれぞれに貴重な言葉を述べられたが、それはセレモニーと心得て忘れ去られても当日の新入会員諸兄は校長のスピーチを胸に深く銘記しておかれるとよいだろう。最も単純なことのようにだが、日常生活の初歩のマナーであり基礎である。四十幾星霜を経て今更ながら大切なことが解る。かく言う小生も田舎者の不器用さと屈折した自意識過剰の少年心理があつて、たとえば故田中悦平校

長には少なからぬ尊敬の念を抱いていたが、こんな場面では虚心に礼を尽くせる程に世馴れてはいなかったと思う。

やがてパーティーは、筑波の科学博で注目をあびる現代彫刻家半田富久さんをリーダーとして応援歌、翠糖を肩を組みつつ歌ううちにフィナーレを迎える。校歌のセルリアンブルーが何とかなう歌も出た。これは曲も詞も素晴らしいものだが、我等の年代には、上州言葉で云えば、のめっこく、入って来ない。漢語調で意味や不明で難解な、旧制高校もどきの「翠糖」が飲んで歌うにはびったりくる。亡くなった真下さんは応援歌「翠糖」をこよなく愛され、末期には声が出なくて見舞に訪ずれた同窓会の人に代りに歌ってくれとせがんだと聞き及ぶ。翠糖を歌いながら、僅か二日前に真下さんの出棺直前、京浜高々会の有志で翠糖を斉唱した状が胸にせまる。岸さんは入沢さんの葬儀を思い出すから今では翠糖は歌えなくなったと言われる。古い人はひとり、又ひとり去り、代りに若者達が大勢集い、歌声は館外にこだまする。意気堂に満つるの景、年々歳々人同じからずだ。古きものは唯消え行くのみか。

葬儀委員長をされた南雲さん曰く、「入沢君、真下君と若い方から順に逝っちゃった。葬儀委員長をやって貰

らうつもりでいた方があとになるんだから。」痛風からステッキに身を支え、参列者に礼を述べられた南雲博士には、黄昏時の三本足の孤影の感もひとしお。思えば南雲さんと真下さん入沢さんの御三方が京浜高々会を高間会長の下で支えた三羽鳥だったと言っても過言ではない。高間会長も病み上がりの身をおして出て来られた。外遊中の父に代って福田康夫氏が弔辞を読み、続いて京浜地区高々野球部幹事長飯島勇さんが弔辞を読まれた。入沢さんの長男、洋一氏御夫妻は最後の御骨拾いまで同行された。真下さんの長男、正大氏は小生とは長年のゴルフ友達、飲み仲間。福田康夫氏とも近年よく会うようになったが、いずれも御父君あつてのもの、京浜高々会の二世達であり、父子二代に亘る御縁である。

顧みれば京浜高々会とは何だろう。後に続く人達のためによき先達となつて道を拓き、標識を建てることであろうか。その辺の効用の程はどうもよく解らない。また、たとえれば帰るべき母港の存在を時々思出させる離れ島の灯台みたいなもので、少しでも輝きを増すように我々はレンズを磨く程度の役割は果たして来たのではあるまいか。母校の名を高からしめるべく高々と灯をかざし、あ

立ててきたように思う。

歌声の中でそのような思いがよぎり、俄かに頭のどこかが白けてきたが、憂いは静かに消え、宴の終りには、二次会に足が向いた。

(日本ドーバー株式会社 53回)

通信制同窓会

早乙女七五三男

いつも大変お世話様になっております通信制同窓会です。高々といえ

今春三月、高崎神社新生会館で、



高々通信制同窓会の総会を開きました。ことしは役員の任期継続中に当たるので、その改選はなく、決算報告、経過報告等ごく簡単に議事は終了しました。そして二十二名の新卒業生を迎えての大卒業祝賀会へと移行します。本部より原同窓会長以下五名の幹事の御来席をはじめ、現職

同窓会だより

旧職の先生方及び一部の在校生を交えて総勢一〇二名のすばらしい祝賀会となりました。特筆すべきは出席の半数が女性ということ。そして場所が結婚披露宴会場だけにその華やかなムードは又格別なものがああります。祝宴が進むにつれて衣裳をつけての舞、あるいは手品、そして唄等、舞台せましと繰り広げられる世界も、もう時間かなと思いうちにお開きになってしまいます。皆さん「通信制を卒業してよかった」という感想を生涯忘れず深く胸に刻んで帰られます。来年はぜひ二〇名以上の卒業を期待して二〇〇名突破記念大会にしたいものです。

その来年のためにもと、八月、美家満にて本部同窓会幹事三名の御来席を得て納涼懇親会を開きました。現職の先生方を交えて二十四名で非常に中身の濃い会合となり、来年一月の同窓会にビューホテルへの参加。今春一月のターミナルビルへの十三名参加の反省等話はずみしました。

このように同窓会とその中の通信制同窓会とは連絡をとりながら今後も楽しくおつきあいさせて頂きたくよろしく願っています。

(高々通信制同窓会々々長 通8回)

高中高高安中会

海保 芳和

「信越線組」の安中に、56年春、同窓会が出来ました。

「高中高高安中会」と呼んでいます。発足のきっかけは、同年の野球部の甲子園初出場が決まった際、地元有志から、「祝賀会をやろうや」ということからでした。安中在住者に声をかけ、「甲子園初出場を祝う会」として三月中旬開かれました。

当日は学校より中沢校長と安中在住の田島秀雄先生、また野球部後援会長の小山禧一先輩も出席して下さい、80名の出席者は昔話や「クラス会歌」や「翠巒」を謳歌し賑やかな一時をすごしました。

この席で「また来年も集まろう」ということになり、会の名称を「高中高高安中会」と名付け、その後毎年三月に原市並木苑で開催してきました。

上は八十路を越えた大先輩から、下は大学を出たばかりの若人が一堂に会し、お互いに自分の年令を忘れて

て学生気分に戻ったように、口角あわを飛ばせております。

店の女将からは「この会は酒量が多すぎる。ほどほどにしないさい」と毎年同じ説教を受けるほどです。

今年の春の卒業生が第83回生。83年間に信越線を通った同窓生は約二千人のことです。そうしますと、このうち安中出身は千人を越えているでしょう。

しかし昨年発行された同窓生名簿を見ますと、このうち現在安中在住者は三百五十人程しかいません。

半分以上の方が現在安中を離れて生活しているわけです。出来ることならこの人たちにも本会のご案内を差し上げたいのですが実務上困難なことをご容赦下さい。

この会には難しい規約などは一切有りません。「青春時代に同じ道を歩んだ仲間がたまに集まり昔話に花を咲かせるのも楽しかろう」ということだけです。遠方におられる方でも機会がありましたらお気軽にお出掛け下さい。

また松井田の方や、育ちは安中ではないが現住所安中という方も何人か出席して下さいます。本会についての詳細お聞きになりたい方は事務局(海保・TEL〇二七三―八

一一二五五二)までご一報下さい。最後に本会の役員の一部を紹介させていただきます。

会長 湯浅 正次(二七回)

副会長 吉田 整(三三回)

金森 信雄(三四回)

荒井 貴(四四回)

幹事長 富田 延利(四六回)

(東邦亜鉛勤務 61回)



33回

卒業生五十年の会

海老原英吉

卒業後、ときれときれながら毎年正月同級会をやっていたが、次第に参加者も少数となり、しかも同じ顔ぶれとなってきた。また、昨年の会で

「オイ、俺達も来年はいよいよ卒業五十年になるぞ!!」

との話が出た。思えば昭和九年三月卒業。在学中満州事変が起り、先生方も……体操の塚越先生、数学の若井先生……と出征し、また同級生の中にも現役志願で入隊した川田君あり、陸士や海兵へと転出して行く者あり、戦争ムードはあったが、次に来る支那事変そして続いている大戦突入の時代に較べればまだノンビリ気分は残っていた。

卒業生（在籍した者を含む）百五十名、いろいろの方面へと進んだが、やがて大部分の者が陸軍へ海軍へと応召、外地へ行く者が続き、残る者がわずかという状況になって来た。

（かく言う小生も昭和十八年九月に召集された）。やがて終戦、間もなく帰って来た者、外地に抑留されて随分と苦労した者等で、仲々同級生



も集ることができなかったが、自然に会の声も出て来て、正月休みに集まろう、一度母校（上和田校舎）へ行って見よう、亡くなった友の供養をしよう、市内竜光寺に集まろう……そして懇親の宴となった。

昨年五十八年四月、「一体俺達は本当に何人生き残っているのか名簿を検討し全員召集をかけてみよう」ということになり、地元の有志が準備を始めた。来年三月が五十周年となるから四月がよい、高崎に近い磯部で一泊ということになり実施のはこびとなった。

出欠員数次の通り（四月七日）

卒業生 一四九

物故者 五七

現在員 九二

通知した者 七七（連絡のとれた者）

欠席 二三（返事のあつた者）

出席 三七

遠く関西、四国からの参加もあり五十年来はじめての友も数名あり、互に仲々思い出せない者もいた。

翠巒影を浮かべては……に始まり、会はずき夜半まで歓談が続いた。名残は尽きず再会を約し、来年の当番は東京在住者が東京でということをお願いあわせた。

「もう此の会の員数は増えることはないのだ。互に頑張ろう。」

（元高校長 33回）

本校出身の

土屋文明氏が

文化功労者に

本校第八回の卒業生である、土屋文明氏は、このたび文化功労者として、去る十一月五日東京霞が関の国立教育会館で顕彰式が行われました。歌人土屋文明といえはあまりにも有名で、その作風は短歌の精神主義を抜け、客観的、生活的、即物的な現実凝視を特質としています。

氏は、群馬郡上野村保渡田（現群馬町）生まれ。本校卒業後東京帝国大学哲学科を大正五年に卒業。同九年長野県諏訪高女校長・昭和二十七年明大文学部教授を勤めました。

その間、歌誌「アララギ」の編集発行に心血を注ぎ、昭和七年から実に五十数年にも及びます。伊藤左千夫に師事、歌集「山谷集」で歌壇に於ける地位を不動のものにしました。以来「ふゆくさ」「続青山集」まで歌集あまた。「万葉集私注」全二十巻の仕事によって、日本芸術院賞を受賞しています。現在日本芸術院会員。九十三歳の高令にもかかわらず、現役として第一線で活躍中。現在所東京都港区南青山三十八―一八。

青松山しらゆきふりて静かなるこのふるさとにいつか帰らむ

母校だより

第38回
高高・前高定期戦二年ぶりの開催で
V3達成

第38回高前定期戦は、まず去る9月8日に水泳・野球の前哨戦が前高で行なわれ、6対9と前高を3点差で追う形となった。本大会は9月28日、秋晴れの日であった。昨年度、国体のため定期戦は開催されず二年ぶりの定期戦となったが、躍動的なプレーと、定期戦ならではの応援とが下沖の校庭のいたる所で見られた。競技は今年も、「一般の前高、部対抗の高々」の言葉通り、22点差を後半の部対抗・玉入れが追いあげる形となった。

最終的に83・5対69・5で高々の勝利となり、28回大会以来、10年ぶ



第38回高々・前高定期戦

競技種目 学校	陸上競技	バスケット	バレーボール	軟式庭球	卓球	駅伝	綱引き	玉入れ	水泳	ラグビー	サッカー	柔道	剣道	野球	硬式庭球	弓道	小計	総合
一般対抗	前高	9	6	3	3	5	7.5	9	3	3							48.5	69.5
	高々	0	3	6	6	4	1.5	0	6	6							32.5	
部対抗	前高	0	0	6	0	0				0	3	0	6	6	0	0	21	83.5
	高々	6	6	0	6	6				6	3	6	0	0	6	6	51	

りのV3達成と、通算20勝という2つの快挙を成し遂げた。定期戦史に新たな一ページを加えたと言ってよいだろう。

(実行委員長三年 鈴木淳一)



〈過去10年間の成績〉

回	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
年	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59
前高	○	●	○	●	●	○	●	●	中止	●
高高	●	○	●	○	○	●	○	○	中止	○

〈通算〉前高一三勝
高高二〇勝 三分け
二中止

●運動部報告

県総体総合2位

全国総体へ2競技出場

あかぎ国体後、再び各部とも母校の名譽をかけて奮闘しております。

春の県高校総体では、再び第2位の座を確保し、関東大会4競技、全国総体2競技が、出場しその覇を競いました。きびしい進学対策の中で、文武共に励む彼らの姿に青春のすばらしさを感じる次第です。

大半の部で3年生がその任を終え、新しいメンバーで基礎づくりを励んでおりますが、例年のとおりサッカー部とラグビー部は、全国大会に向け3年生を含めて大奮闘をしております。

また、吉井達郎君（ラグビー部3年）は、夏に行なわれた日韓交流戦に日本高校選抜の一員として選ばれ、釜山でその大役を果たしてまいりました。在学中に日本代表選手に選ばれたのは、私の記憶では初めてのケースと思います。

各部戦績は次のとおりです。

●野球部

秋季大会2回戦、春季大会3回戦
夏季大会2回戦。

●ラグビー部

新入戦第2位、県総体優勝、関東大会出場（宇都宮2勝）、国体予

選第2位。

●バスケット部

新入戦優勝、春季選抜関東地区代表決定戦出場、県総体第3位、全国県予選第3位、国体予選準優勝強化大会第3位。

●バレー部

新人戦第3位、県総体第3位、関東大会（水戸）1回戦、全国総体県予ベスト8、国体県予ベスト8。

●陸上競技部

春季陸上 5000m 1位15分9秒 黒沢一、1000m 2位11秒3 佐藤正紀、走巾跳 3位6m68武井務 県総体 走巾跳 1位7m22武井務 1500m 2位4分04秒 黒沢一、5000m 1位15分9秒 黒沢一、4×1000R 3位43秒2（藤間、武井、林、佐藤）。関東大会（上尾）走巾跳 2位7m29武井



務 5000m 5位15分8秒 黒沢一

道。全国総体（秋田）走巾跳武井務 5000m 黒沢一、道出場。学校対抗（1部）5000m 1位14分9秒 黒沢一、走巾跳 2位6m67武井務。

●サッカー部

全国選手権県予選ベスト8、新人戦ベスト8、県総体ベスト8、全国総体県予選第3位、全国高校選手権県予選決勝進出。

●軟式庭球部

新人戦優勝（今井・伴田組） 県総体団体 4位、全国総体県予団体 2位、関東選手権 今井・伴田組 3回戦、渡辺・岩瀬組 3回戦、中島・鈴木組 2回戦。

●柔道部

新人戦2回戦、関東新人県予2回戦、県総体3回戦、全国総体県予ベスト8、個人城田雅之（中量級）ベスト8。

●剣道部

新人戦ベスト8、県総体ベスト8 全国総体県予ベスト8、学校対抗第3位。

●水泳部

関東県予200バタ 4位他、県総体総合5位、200バタ 4位他、新人戦400自 3位、100バタ 2位、400メド 2位、200平 2位、1500自 3位、200平 3位、400個メ 3位他、6位内5種目。

●卓球部

新人戦団体2回戦、県総体団体2回戦、個人5回戦、国体予団体1回戦、1年大会個人ベスト64、新人戦団体2回戦。

●登山部

県総体出場他

●硬式庭球部

新人戦第3位、県総体ダブルス優勝（山口・左近組）団体3位、関東大会（笠松）ダブルス（山口・左近組）1回戦、全国総体（秋田）ダブルス（山口・左近組）1回戦。

●弓道同好会

春季大会団体優勝、個人（小島誠3年）準優勝、県総体個人（瀬下勇人2年）優勝、全国総体県予、秋季大会出場他。

●空手道同好会

新人戦、県総体他出場。（運動部長 中原射鹿止 55回）

●学芸部近況報告

生物部

はじめに、田島秀雄先生が前年度末で御退職（停年退職）されたことを報告しておきたい。

本校で勤続三十八年間、生物科教員として生物授業・生物部の指導をはじめ校内のあらゆる分野での先生の御活躍は諸先輩の知るところですが、群馬県生物教育研究会でも長年

にわたって副会長として御活躍されておりました。先生は現在、生物関係の御仕事もなされ元気で過されている御様子でございます。

前号の報告では「昭和三十・三十八年には群馬県学生科学賞の群馬県審査で最優秀賞を、五十六・五十七年には優秀賞を連続して獲得している。」との報告がなされました。その後、五十八年度でも「水生昆虫による碓氷川・烏川の生物学的環境の考察」で優秀賞をいただいております。

又、毎年、群馬県理科研究発表会において研究成果を発表しています。が、今年は「水生昆虫」・「カワセミ」・「細菌」の三テーマによる研究発表を予定しています。やや部員数が少なく研究活動に苦勞する部分もありますが部員達は先輩の築いてくれた伝統をうけつぎ、活発な活動を続けているところです。

(顧問 佐藤忠弘)



最近の進学

状況について

今春の大学入試は旧教育課程による最後の入試でありましたが、現役浪人ともに高々健児の健在ぶりを発揮してくれました。特に浪人組の健闘は目覚ましかったと思います。

いよいよ、来春は新教育課程による初の大学入試を迎え、現三年生がそのトップバッターとして挑戦することになります。

新教育課程とは、所謂「ゆとり」の教育課程であり、小・中・高を通じて、従前の学習量を大中に削減した教育課程であります。その結果として生ずる学力は言わずもがなでありましょう。特に、中学校における英語と数学の学習時間の減少は、大学進学を目指す生徒達にとって大変不利に働いています。

さらに、大都市を中心に見られる中・高一貫教育により進学実績を上げていく私立の学校や予備校の台頭が年々目立つ昨今であり、公立高校の現役が志望大学に合格することは大変きびしい状況となっています。

このような情勢の中で、本校では、学校長をはじめ全職員が丸となつて、学力向上対策を講じ、進路指導に向けて鋭意努力を続けており、来

春も高々健児の大いなる健闘を期待しております。

(進路部長 森慶寿 52回)

進学状況(全日制)

()は現役

種別合計(全日制)

大学	年次	57年	58年	59年	大学	年次	57年	58年	59年
北大	大	5(0)	3(1)	4(1)	高経大	大	44(15)	18(8)	24(9)
東北大	大	24(13)	13(7)	24(14)	高早大	大	54(21)	57(8)	89(19)
東京大	大	4(2)	10(6)	8(3)	慶応大	大	19(7)	27(7)	44(12)
一橋大	大	4(2)	3(1)	3(1)	中央大	大	44(14)	33(6)	50(15)
東工大	大	2(0)	6(2)	6(2)	明治大	大	57(16)	68(7)	58(14)
千葉大	大	5(3)	5(1)	8(1)	日本大	大	24(3)	25(5)	34(5)
京都大	大	1(0)	3(0)	6(2)	上智大	大	7(1)	16(5)	13(1)
新潟大	大	8(6)	11(5)	11(3)	法政大	大	17(4)	32(3)	18(2)
筑波大	大	6(4)	5(3)	7(5)	立教大	大	16(5)	17(1)	19(1)
金沢大	大	7(5)	4(3)	7(2)	東京電機大	大	4(0)	7(1)	7(2)
東外大	大	5(2)	6(1)	1(0)	東京理大	大	44(8)	22(4)	52(7)
群馬大	大	58(34)	46(28)	63(34)	芝浦工大	大	5(1)	5(2)	5(2)
横国大	大	5(2)	13(6)	5(2)	成蹊大	大	10(2)	6(0)	7(0)
静岡大	大	2(1)	2(0)	2(2)	学習院大	大	8(1)	1(0)	7(1)
山梨大	大	1(0)	1(0)	1(1)	青山学院大	大	21(9)	15(3)	15(6)
埼玉大	大	3(0)	2(2)	8(3)	武蔵大	大	6(0)	2(1)	4(0)
信州大	大	4(1)	0(0)	7(2)	同志社大	大	6(2)	8(5)	5(2)
横浜市大	大	0(0)	0(0)	2(0)	立命館大	大	4(0)	4(2)	3(1)
					その他		162(43)	166(36)	220(55)

進学率	現役進学者数	卒業生数	総計(延数)	D短大、各種他	A+B+C	C私立	B公立	A国立	大学別
40.7%	161	405	710	8(3)	702(227)	471(122)	61(22)	170(83)	57年
36.3%	138	401	662	10(5)	652(165)	476(86)	26(8)	150(71)	58年
45.3%	180	400	847	13(3)	834(229)	589(131)	45(10)	200(88)	59年

財団法人設立経過報告

ロマンを求めて

昭和五十六年、春、同窓会、全校挙げての三代の悲願、長き思いの夢を果した、甲子園選抜大会出場の快挙に、同窓生の心意気がいかに発揮された事は記憶に新しい。

幸か不幸か、多くの方々からの浄財を残してくれた。事後処理として同窓会に寄託された三千万円はクラブ活動振興基金として運営を委ねられ、運用の基本方針は取崩しをせず利息金より補助する事が確認された。

(昭和五十六年六月一日)子供達の為に集められた基金を如何に有効に使用するかは、同窓会に与えられた大きな命題である。恒久的に教育振興に資する為には、凍結宣言をした基金でもあり、公益法人の基本財産として拘束する事に、些かも本質的には変りなく、法的利点を得る事に衣更えしただけの事になる。

この発想は、時代の変化の中での当期役員としての必然であり、当然の帰結でもある。会長の裁可を得て昨年末以来、起案計画についての胎動が始まり、本部幹事会、常任理事会、理事会、総会、管理委員会の議を経て、設立趣意書、寄付行為を成案として県教委の指導を仰ぎ乍ら、

六十年発足を目標として、設立実務に鋭意努力している昨今である。二十一世紀に向け、私達同窓会がその目的を一層充実し、遂行する為に管理機構を明確にした、財団法人翠鸞育英会を設立し、ここに広く郷党の教育を確立し、未来に果てしない夢とロマンを託する縁としたい。

同窓各位の一層の御理解と御支援を賜り度い。

トレーニング機器

募金報告

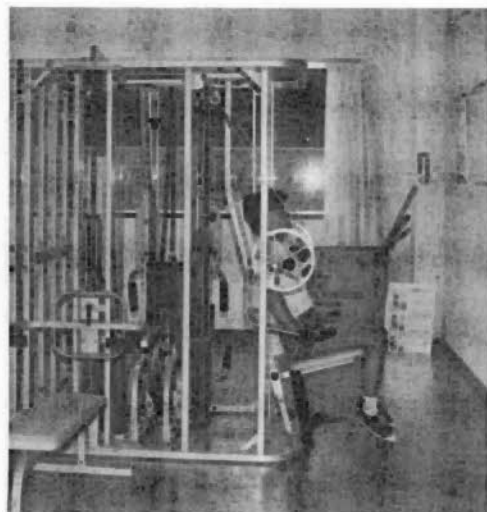
昨年四月県費二億二千万円により屋内総合体育館が校地内西北隅に完成しました。これにはトレーニング室が設置されているもの、肝腎のトレーニング機器を欠き画龍点睛を欠く感がありました。しかしその購入の財源もなく関係者が苦慮しているとの学校からの相談がありましたので、昨年四月・六月の常任理事会・理事会で提議しましたところ、同窓生のご協力を得てその購入資金を援助することが確認されました。直ちに「高崎高等学校校地内総合体育館付帯施設設置助成同窓会実行委員会」が組織され、昨年九月一日より募金活動が始まり、本年四月一日までに下記実施報告の通りのご厚志が

屋内総合体育館付帯施設設置助成事業実施報告

同窓会寄付	7,998,580	合計	
同上利息	12,158		8,010,738
付帯施設購入費			
・コンビネーションマシン	5,800,000	合計	
・バーベル及び付属品	550,000		9,015,200
・上体そらし測定計他	68,000		
・AGブーツ	110,000		
・5段レタ・ケース 書庫他	159,200		
・データ処理用機器			
OKI コンピュータif800	2,223,000		
ファイル及びキャビネット等	105,000		
※不足分についてはPTAより	1,004,462円補填		

寄せられました。この結果、左記の付帯施設購入費の大半を同窓生のご厚志によりまかなうことができました。同窓生諸兄のご協力に厚くお礼を申しあげます。

高崎高等学校校地内総合体育館付帯施設設置助成同窓会実行委員会
委員長 原 一雄



同窓会費期別納入状況

期別	事業年	人数	金額	24	14	11	44	38	14	12	32	52	28	48	124	66	42	25	58	80	56	35	70
5	明39	1	2	25	15	7	22	39	15	9	22	53	29	49	133	67	43	24	64	81	57	35	73
11	45	1	2	26	2	11	25	40	16	22	78	54	30	35	94	68	44	23	57	82	58	50	100
13	大3	1	2	27	3	14	26	41	17	22	53	55	31	24	52	69	45	26	65	通信制		25	54
14	4	1	2	28	4	11	40	42	18	27	92	56	32	36	88	70	46	23	54	定時制		23	48
15	5	3	8	29	5	13	71	43	19	20	45	57	33	29	82	71	47	22	46	校内			46
16	6	1	2	30	6	14	63	44	20	32	74	58	34	23	89	72	48	24	53	年度別納入状況 87年 4,102,136円 88年 4,144,000円 89年 3,948,000円 (16/20現在) 89年度員 163人中89人納入			
17	7	4	15	31	7	15	46	45	20	24	77	59	35	20	42	73	49	20	42				
18	8	1	2	32	8	20	60	46	21	22	34	96	60	36	25	58	74	50	25				
19	9	2	4	33	9	23	65	47	23	27	78	61	37	17	42	75	51	18	36				
20	10	9	19	34	10	10	34	48	24	13	38	62	38	24	53	76	52	30	62				
21	11	2	32	35	11	9	33	49	24	25	32	98	63	39	22	65	77	53	37				
22	12	9	21	36	12	11	27	50	26	29	47	143	64	40	14	39	78	54	46				
23	13	4	11	37	13	14	39	51	27	21	29	78	65	41	16	40	79	55	37				

昭和58年度高々同窓会経常会計報告

(昭和58年1月～12月)

収入の部

費目	58年度予算	実収入	備考
繰越金	771,677	771,677	
入会金	860,000	828,000	全日制405 通信制9
維持会費	4,000,000	4,144,000	
利息	70,000	29,534	
合計	5,701,677	5,773,211	

支出の部

費目	58年度予算	実支出	備考
会議費	770,000	741,134	理事会、幹事会、総会
祝賀費	300,000	265,000	祝金、卒業ケース等
餞別費	200,000	116,000	転出職員へ
慶弔費	150,000	49,000	花輪代
通信印刷費	500,000	549,252	ハガキ、切手、振込用紙
旅費	80,000	108,800	京浜同窓会出席等
總會通信印刷費	1,000,000	1,005,060	總會通知等発送
同窓会報費	900,000	780,000	同窓会報印刷
事務費	800,000	576,880	人件費
同窓会長賞	100,000	82,500	
補助費	400,000	400,000	翠らん体育会、図書館補助
雑費	50,000	26,650	
予備費	521,677	110,400	
同窓会基金へ		500,000	
次年度へ繰越		462,535	
合計	5,701,677	5,773,211	

昭和58年度高々同窓会特別会計 (同窓会基金)

(昭和58年1月～12月)

収入の部

費目	金額
繰越金	4,841,480
利息	184,371
58年経常会計より	500,000
合計	5,525,851

支出の部

費目	金額
な	し
残高合計	5,525,851円
(高崎信用金庫西支店定期預金)	

昭和59年度高々同窓会経常会計予算案

(昭和59年1月～12月)

収入の部

費目	昭和59年度予算	備考
前年度からの繰越金	462,535	
入会金	850,000	全日制405
維持会費	4,300,000	通信制20
利息	30,000	
合計	5,642,535	

支出の部

費目	昭和59年度予算	備考	○増△減
会議費	800,000		○ 100,000
祝賀費	300,000		同
餞別費	150,000		△ 50,000
慶弔費	80,000		△ 70,000
通信印刷費	600,000		○ 100,000
旅費	120,000		○ 40,000
總會通信印刷費	1,100,000		○ 100,000
同窓会報費	900,000		同
事務費	500,000		△ 300,000
同窓会長賞	100,000		同
補助費	600,000		○ 200,000
雑費	50,000		同
予備費	342,535		
合計	5,642,535		

昭和59年1月26日 高々同窓会監査 須永 孝

石井敬之助

高々同窓会会計 志村紀三男

設楽 春樹

クラブ活動振興基金会計報告

(昭和59年1月20日現在)

(一)定期預金 (高崎信用金庫・群馬銀行)

合計 30,000,000円

(二)普通預金 (利子) (高崎信用金庫・群馬銀行)

合計 2,031,345円

翠巒文庫 (その四)

翠巒文庫は卒業生の方々が書き
にられた著書で、学校へ寄贈して
くださったものです。

書名

著者

インドパキスタン現代史 蠟山芳郎 24回

世界名著ガンジー 蠟山政道 12回

日本の前途教育政策 蠟山政道 12回

日本の民主主義 蠟山政道 12回

教育の中立性 蠟山政道 12回

行政改革の諸問題 蠟山政道 12回

民主社会主義への道 蠟山政道 12回

免疫化学 蠟山政道 12回

土曜クラブ会報 蠟山政道 12回

曲面夢中 蠟山政道 12回

黄花山房 蠟山政道 12回

花だより 蠟山政道 12回

群馬の短歌集 蠟山政道 12回

大沢雅休書簡集 蠟山政道 12回

金古宿関係史料 蠟山政道 12回

臥雲関係資料 蠟山政道 12回

どんぐり 蠟山政道 12回

絵のある風景 蠟山政道 12回

ふろんてあ 蠟山政道 12回

句集脈絡 蠟山政道 12回

城南閑話 蠟山政道 12回

おもかげ 蠟山政道 12回

土屋文明その故郷と歌 大井恵夫 旧職

黄花房独語 原 一雄 29回

(吉永哲郎 54回)

昭和58年度庶務報告

一月二日 (土)	第八一回総会
三月二八日 (月)	本部幹事会
四月三〇日 (土)	常任理事会
五月一九日 (木)	本部幹事会
六月二七日 (月)	理事会
七月一八日 (月)	本部幹事会
七月三一日 (日)	本部幹事会
九月一四日 (水)	京浜同窓会
九月一六日 (金)	常任理事会
十一月二一日 (月)	本部幹事会
十一月二八日 (月)	理事会
十二月七日 (水)	本部幹事会
十二月一九日 (月)	本部幹事会

事務局だより

◎原会長より「折口信夫全集ノート
編全18巻、第33回卒業生より「原色
浮世絵大百科事典」全11巻を御寄贈
いただきました。深謝申しあげます。
◎九十周年記念事業の準備が開始し、
六十年には本格化したします。
◎クラブ振興基金の財団法人化が着
々と進行中です。
◎山々の紅葉も深まる中、十八号が
できあがりました。御多忙の所、原
稿をお寄せいただいた方々に厚く御
礼申しあげます。(本部幹事・校内幹事)

高崎 高校同窓会報 No 18
昭和五十九年十一月十七日発行
編集 本部幹事会
印刷 出版あさき社